

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その13)

1935(昭和10)年3月号

兄彦吉が「転向」する。

1935(昭和10)年4月号

東助と鈴子の結婚が決まる。



監修 堀越芳昭

山梨学院大学 元教授

兄彦吉が、突然大塩村にやってくる。当初は東助の活動に怒るが、特約組合に将来性がないこと、消費組合の隆盛ぶりを認め、東助に「わしを、消費組合に紹介してくれ」と頼む。こうして二人は上田市に向かうが、東助には鈴子との関係を明確にしたいという目的もあった。

上田に着いた二人を待っていたのは、浅間銀行の倒産騒ぎであった。

お竹のことが気になった東助は、元芸者屋の鶴家に向かう。お竹が現れ、東助に教えてもらった信用組合(産業組合)に半額を移したと感謝される。お竹と仲が良かった新聞記者が現れ、信用組合の配慮で預金に戻ってくることを説明する。安堵したお竹は、東助と鈴子の結婚が正式に決まったことを新聞記者に明らかにした。

浅間銀行の預金に戻ってくるという朗報を捨一に届けるために藤井亭に走るが、捨一が亡くなっていることに直面する。葬儀の翌日、東助は鈴子とともに磐梯山の麓に帰っていく。

■ 兄彦吉が産業組合へ「転向」する

大塩村で産業組合が動き始めて間もなく東助にとってうれしいことが起きた。それは兄彦吉の特約組合から産業組合への「転向」であった。

柿ノ木の省七が特約組合の解散方法を尋ねてきたので、東助が彦吉にそのことを伝えると彦吉は信州から突然やってきた。当初、彦吉は特約組合を弱体化させた東助を殴るなどして怒ったが、二人で話をするうちに特約組合では今後やって

いけないことを認めた。東助は、さらに一步奥へ突き進んで兄に言った。

「にいさん、特約組合に将来がないなら、にいさんも産業組合運動に参加したらどうですか」

「おれは、今になって後悔しているよ。おまえが、手をつけた、あのさかなの消費組合なあ、あれが、とても今ごろ盛んになって、藤井の店は、もう近ごろ、とんと売れなくなってしまったよ。おれは、こんなに急激に消費組合が発達するとは思わなかったよ。(略) どうじゃ、東助、おまえ、もう一度川西の消費組合に、わしを紹介してくれんか」

兄の著しい転向ぶりに、弟はまったくびっくりしてしまった。

「できるでしょう、にいさん。二人で上田へ行きませんか？……」

そう言って、東助は立ち上がった。

こうして東助は兄の就職を助けるため長野県上田市へ向かうことになるが、東助にはもう一つの目的があった。

兄彦吉と特約組合と産業組合について議論しているとき、電報配達夫が電報を届けた。彦吉はそれが東助宛であると確認すると遠ざかり、それを見て東助は手に取り読んだ。

「キュウヨウアリ スグコイ スズコモキテイル コマイタケ」

発信局は上田であった。で、その電報はまがいもなく、榎本鈴子を養女としていた、鶴家の女将お竹が打電してきたものに違いなかった。

東助は、養子問題が復活したのだろうと察したものの、兄彦吉には話さなかった。東助には愛を誓い合った榎本鈴子との関係を明確にしたいという目的があったのである。

■ 浅間銀行の倒産騒ぎ

こうして上田市に向かった彦吉と東助を待っていたのは浅間銀行の倒産騒ぎであった。二人が上田市に着いた次の日の朝のことである。

兄の彦吉が、あわただしく表からはいつてきた。そして新聞を読んでいた東助の後ろを通過して、奥座敷で、かけ売りの計算をしていた彦吉の養父捨一に、大声で言った。

「浅間銀行がつぶれるってよう。みんな通帳と判を持って押しかけてきよるが……うちもすぐ引き出さんと銀行にお金をうばわれてしまうかもしれんよ」

便所にはいつていた養母が、その声を聞いて、びっくりして飛び出してきた。彼女は、金切り声を張り上げて、半泣きになって言った。

「そらたいへんじゃ。おとうさん、あなた、判を持って、すぐに引き出しにいらっしゃいよ」

おやじもびっくりして、たんすの引き出しに手をかけた。

ここから捨一のドタバタ劇が始まり、後で見るように悲劇につながっていく。

捨一は銀行に向かうが、立派な建物の銀行の前には数千人の者が集まって騒いでいた。銀行の扉は堅く閉ざされて、その前に巡査が張り番をしていた。そこに、捨一が人垣をかきわけてやってきて、半狂乱のようになり、大声でどなりちらした。

「おい！　そこをあけんか、そこを。いつまでぐずぐずしとるんじゃ！　人の金を預かっておいて、よこさないって、なんじゃ！」

鉄の扉を嚴重に守っていた巡査がやってきた。そして、捨一に言った。

「こらっ、そこへさわっちゃ、いかん！」

そう言っても、親爺は聞かなかった。

「おい、ここからでもいいから、金を出してくれやい、金を！」

こうしたやり取りの後、巡査は「それなりに預金が有る者は銀行の整理がつくまで、待たなくちゃならんだろう」と考え、捨一は落胆する。遠くから捨一のことを心配しながら見ていた東助の前に捨一が姿を見せるも、「彼の目はすわり、髪は突き立ち、下あごは下がり、帯は解け、ほとんど気狂いのようなかっこう」であった。これは捨一だけでなくあちこちで見られた光景であったろう。それは次に続く描写から読み取れる。



あちらこちらに銀行をののしる声が聞こえた。それに混じって、女の泣き声や、すすり泣きの声がした。

そのとき東助は、資本主義の末路を見届けたように思った。町を埋めた群衆は、朝から立ちどおしているというのに、九時になっても十時になっても、身動きもしなかった。

捨一の姿がどこかに消えてしまったので、東助は心配していた鶴家のおかみに会うために群衆から離れて、鶴家に回った。

■ お竹、東助に産業組合を紹介してくれたことに謝辞を述べる。

さらに新聞記者に東助と鈴子の結婚が決まったことを明らかにする

正月以来芸者屋を廃業した鶴家は、門の看板もはずしてしまい、表門も閉めていたため東助は小さいくぐり戸から入った。女中のお松と、銀行のうわさをしながら玄関に立っている鈴子を見つけ、話しかける。

「おかあさんは、だいぶやられたたでしょうね。どれくらい銀行にあったんですか？」

東助は、格子戸の近くまで進みながら、尋ねた。

「さあ、二万円ぐらい銀行に入れておいたんじゃないでしょうか……しかしだいじょうぶなのよ。おかあさんはね、きのうあなたから産業組合の話を聞いたでしょう。それでね、すぐあれから一万円だけ信用組合に持っていかれたのよ。ですから、すっかりやられなくてよかったのよ。まず一万円だけは助かったわけね。だから、さっきも喜んでいらしたわ。東助さんが来たおかげで一万円拾ったと言って」

そこにお竹が帰ってきて、東助の顔を見るなり、

「あなたがきのう教えてくれたおかげで、一万円だけ、あれから信用組合へ持っていったのよ。今も帰りにね、信用組合へ寄ってみましたら、だいじょうぶですって……まあおはいりなさいよ、お茶でも入れましょう」

お竹は玄関に入っていきが、うしろから東京新聞の青年記者が入ってきた。お竹と仲が良く、お竹の預金を心配して駆けつけたのである。

「今、長野支局に電話がはいりましたがね。知事の要求によって臨時県会を招集しているそうです。知事の要求は、県が保証して、中央金庫から、大至急四百万円を、長野県信用組合連合会に借り入れ、さらに、信用組合連合会は、浅間銀行を救済する目的をもって、二百万円だけ、浅間銀行に預金させるんですって。そ



うなれば、あすは銀行の扉だけはあけることができる予定だそうです。そうしないと、信用組合が、浅間銀行に預けてある預金もすっかり取られてしまうそうです。知事も太っ腹だが、信用組合っていうものも、えらいものですね。まったく、信用組合のおかげで、こんどは銀行の当事者も命を拾ったわけですよ。わたしは信用組合に、そんなに大きな力があるとは知りませんでしたなあ。今日では、全国の信用組合が十八億円の金を回しているんですってね。えらいものですね。やはり団結の力ですね」(略)

玄関にすわり込んだお竹は、東助の顔を見ながら言った。

「やはり、あなたの言うのはほんとうだったんだわね。もう時代が来ているんですね。銀行のような、自分だけがもうければいいという組織は、時代遅れなんですね」

東助とお竹二人のやり取りを見ていた新聞記者がお竹に尋ねた。

「あなたが言っていた養子さんて、この方なんですか」(略)

「ええ、そうなんです。ようやくきのう正式に決まりましたんでね。近いうちに、婚礼をしたいと思っているんですよ。しかし……わたし安心しましたわ。じゃあ、浅間銀行に預けてあるお金も、今すぐでなければ取れるんですね」

お竹は、東助が養子となり鈴子と結婚することが決まったことを明らかにし、また浅間銀行への預金が戻ってくることを喜んだ。

■ 彦吉の養父捨一死亡

「浅間銀行に預けてあるお金も、今すぐでなければ取れる」ということを新聞記者から聞いた東助は、彦吉の養父捨一に知らせてやろうと藤井亭に走った。そこには信じられないことが起こっていた。養母のこののすすり泣きしている声が聞こえてくる。

どうしたことが起こったかと、東助は奥をのぞいた。すると、そこには、このが、捨一の堅くなった死がいに抱き付いて泣いていた。

どうして、そんなに早く、老人が死んでしまったかを、彼は彦吉に尋ねた。すると兄は、

「ふだんから医者に、非常に血圧が高いから注意するようにと言われていたんだがね。あまり心配したから、ぐっと来たんだらうと思うんだよ。さっきな、表から帰ってきて、店先に腰をおろしたと思うと、ばたっと倒れてしまってな、それっきり脈も止まってしまうし、呼吸もなくなってしまったんだよ。(略) 去年もちょっと、こんなことがあったんだがな。そのときは、卒倒したばかりで、一週間ぐらいしてすぐなおったが、いやほんとうに人間っていうものはわからんもんだね。こんなにもろくいくとは思わなかったなあ」

彦吉は捨一の最期について語るが、浅間銀行の倒産騒ぎが死に追いやったとも言えよう。

葬式がすんだ翌日、彦吉を浦里村の産業組合に紹介しておいて、その日の昼ごろ、結婚することが決まった鈴子を連れて、磐梯山の麓まで帰っていく。

次回以降、磐梯山の麓で苦悩しながらも新しい試みにチャレンジする二人の奮闘ぶりを見ていきたい。

<参考文献>

『家の光』(昭和10年3、4月号)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。